



看護師つれづれ日記⑤ 在宅での看取り



皆様「看取り」と聞いて思い浮かぶこと、皆様がイメージされることはどんな事でしょうか？病院で点滴、モニターにつながれている様子ですか？家族に囲まれて静かに過ごす様子ですか？どちらもありません。病院での勤務を約20年経験し、在宅での看護師をし、両方の環境で数多くの看取りをさせていただきました。コロナの影響で入院したら面会ができない今、在宅看取りが増えています。

今回はその「在宅看取り」について、私の日々心掛けていることをお話させていただきます。

老衰、末期の病（癌に限らず末期の状態を含めます）突然死、訪問看護の中で様々な看取りを担当させていただきました。全ての告知を受けて、自らの意思で在宅を希望された方、本人には告知せずに家族の希望で在宅を選ばれた方、介護力の問題等、色々な理由で在宅看取りが選ばれています。

「これが正しい」「こうあるべき」という事はなく、ご本人、家族が決めた場所で、覚悟を決めて穏やかな時間を過ごす為のお手伝いをさせていただいています。在宅だから痛みが取れない、苦しいという事は全くありません。医師も看護師も頻回に訪問しますし、苦痛を緩和する為の治療は病院も在宅も変わりありません。必要に応じて

点滴も行いますが、点滴によって様々な事が制限されることもあります。それは、「在宅」という本人が一番落ち着く場所で最期まで穏やかに過ごす」という事が目的だからです。治療が目的ではありません。残された時間を、好きな場所で、好きな人達とどう過ごすか、治療が優先ではなく、穏やかに過ごせる事が優先です。点滴も、酸素も、カテーテル類もその為に行うと思っています。点滴をしていても、入浴できます。どんなに動けなくても、本人、家族が望めば入浴します。（訪問入浴サービスを利用する場合もあります）食事も同じです。病院のような食事制限はありません。本人が望めば、最期まで家族と一緒に食事をします。食べる量が少なかったとしても、栄養を摂る事が目的ではないからです。家族と一緒に、望むものを食べる。その時間を優先するからです。そのように、ご本人、家族が望む事を優先し、それができるように苦痛を除去するための治療、お手伝いをさせていただきます。状態が悪くなり、その時を迎える頃、残りの時間が少ない事もご家族に伝え、ご家族がしてあげたい事を家族の皆様は一生懸命行っています。

私は、看取りを担当させていただく際に、いつも思うことがあります。それは、「本人も、ご家族も後悔しないこと」残された人はこれから生きていかなければなりません。どんなに寄り添った家族でも、亡くなった後は後悔することが多いです。でも、その中で「ここまでやった」「故人と過ごした思い出辛い顔ではなく、ほんのひと時でも一緒に笑った笑顔」がしつかりあれば、前に進めると思うからです。最期の時間を過ごすというのは、どんなに覚悟された人でも悲しく、辛い時間です。誰も経験した事のない、死というものを目の当たりにしているのですから。

私は、状態が悪くなる利用者様を前に、いつも思います。誰も知らない世界、死に向き合っている今、どんなに怖く、不安だろうと。その恐怖、不安と戦いながら日々過ごされている姿、せめて、その不安を和らげたい。それが、看護師でも医師でも、家族でもいい。一人にさせたくないといつも思います。そしていつでも緊急コールに対応できるようにしています。痛みや苦痛は薬で緩和し、取る事ができます。

しかし、不安、恐怖、精神的なものを緩和させるのは人の力だと思っています。看護師である前に、そばにいる事で安心できる、穏やかでいられる、それができる人間性を持ちたいと思っています。看護師として看取らせていただいた方、忘れることはありません。

「今の私はどうですか？」
その季節になると、道を通るといつも思い出し問いかけます。最期の時間を一緒に過ごした看護師として恥ずかしくない姿でいたいと思っています。

